海浜に立地する観光温泉地域(1)共有の景観(2)を眺望できる視点場の特性

渡辺 貴史*・高村 文人**・山中 佑太**・米原 大器**

Characteristics of Viewpoints Having the Views of Collective Tourism Resources in Seaside Hot Spring Areas

Takashi WATANABE, Ayato TAKAMURA ,Yuuta YAMANAKA and Daiki YONEHARA

Abstract

This research is to identify characteristics of viewpoints having the views of collective tourism resources in seaside hot spring areas. The main findings are as follows. 1) For identifying collective tourism resources, landscape pictures which appeared in tourism informational materials (e.g. guide book, picture postcard and hotel's booklet etc) in Obama hot spring areas, Nagasaki Prefecture are used as data. Based on landscape elements in landscape pictures, the list of tourism resources is developed. Landscape elements which are identified tourism resources including the list in each landscape picture is counted. Using these figures, appearance frequency of each tourism resource in total landscape pictures is calculated. Tourism resources which emerge at a high frequency are identified as collective tourism resources. Consequently, 5 tourism resources ('Sea', 'Low-mountain area', 'Hotel','Sunset' and 'Points giving off steam') are identified as collective tourism resources. 2) To classify viewpoints, panoramic photographs are taken at the points (128 points) which is set up in whole case study area. The ratio of total pixels of 5 collective tourism resources and the others in panoramic photograph is measured. Viewpoints are classified into 6 types by non hierarchical clustering using aforementioned parameters. 3) To identify location environments of viewpoints having the views of collective tourism resources, the relationship between geographical distribution of 6 type viewpoints and the periods of landfill is examined. Case study area is classified into 3 categories on the basis for the periods of landfill. These 2 parameters are cross-tabulated. As a result, the newest landfill areas include many viewpoints where the views containing high portion of collective tourism resources have. Based on these findings, we propose a list of considerations for reviewing the management to develop viewpoints where the views of collective tourism resources have in seaside hot spring areas.

Key Words: Viewpoints, Collective Tourism Resources, Seaside Hot Spring Areas

1. はじめに

観光温泉地域は、旅行先で行いたい行動の第一位に「温泉浴」が挙げられているように(日本観光協会，2009)[1]、多くの日本人にとって余暇活動に欠かせない場所といえる。

先に述べた潜在需要が存在するにも関わらず、観光温泉地域全体の宿泊利用者数は、1998 年度が 139,711,747 人、平成 20 年度が 132,677,295 人と約 700 万人、減少している(環境省，2010)[2]。しかし地域間で比較すると、二極分化しているといわれている。つまり、利用者数を維持・増加させている地域がある一方で、利用者数を減少させている地域が数多くみられると指摘されている(久保田，2008)[3]。

そうした利用者数を減少させた観光温泉地域のなかには、利用者数の増加に向けた方策を検討・実施している地域が数多く存在すると考えられる。この

*長崎大学環境科学部
**長崎大学環境科学部・学生

(受理年月日　2010 年 3 月 31 日)

ような方策を検討するにあたっては、利用者の意向を反映させることが望ましい。

観光温泉地域に対する利用者の意向に関して、山村(2006)[4]は、価値観の多様化が進む現在においても、年齢・性別を問わず、3 つの要素、すなわち「自然環境」、「温泉情緒」、「温泉資源」に集約されると論じている。これら 3 つの要素は、利用先の選択時においてはパンフレットやインターネットを介して、利用時においては散策等の移動を通じてと、利用者の視覚によって認識されることが想定される。つまりこのことは、利用者の意向を反映させた重要な方策の一つは、先の 3 つの要素を兼ね備えた観光温泉地域らしい景観整備であることを示唆するものといえる(安達ら，2009)[5]。

こうした温泉地域らしい景観整備の方策の検討にあたり、重要なことは、整備の対象となる観光温泉地域らしい景観とは何かを明らかにすることである。景観整備は、当該地域に関係する様々な主体の関与のもと進められることが多い。利用者の意向がはっきりとしない状況のもとで、そうした主体が方策の対象とすることに合意する景観の一つとしては、地域に関わる多くの主体が地域を代表すると考えている景観(以下では、共有景観と称す)が挙げられる。

先に説明したように、共有景観は、人々に眺められることによって認識される。そのため、共有景観の特定とともに、共有景観を眺められる場所(以下では、視点場と称す)の特性を明らかにすることも欠かせない。

本研究に関連する先行研究は、内容から大きく 2 つ、(1)観光温泉地域において眺められる景観の特徴を明らかにした研究と(2)景観評価を行った研究に分類される。

上記(1)に分類される眺められる景観の特徴を明らかにした主要な研究としては、湯煙と街路に着目したものがある。湯煙に関しては、湯煙の分類(姫野ら，2003)[6]、湯煙がみられる景観の構図(穴見ら，2003)[7]、湯煙がみられる視点場の特性(松尾ら，2005)[8]が明らかにされている。街路に関しては、日本の温泉地域の街路景観の多様性を検討したもの(下村ら，1989)[9]、街路景観を構成する要素の空間布置を明らかにしたもの((高橋ら，2008)[10]、(宮崎ら，2008)[11])、そして日韓比較を試みたものがある(金，1999)[12]。しかしこれらが対象としている景観及び視点場は、限定されている。観光温泉地域全体の景観整備方策の検討には、より多くの景観・視点場を対象に含むことが望まれる。

上記(2)に分類される景観評価を行った主要な研究としては、上記(1)の研究と同様に、湯煙と街路を評価したものがある。湯煙に関しては、著者らが設定した基準(穴見ら，2003)[13]、(嶋田ら，2005)[14]と心理評価実験から評価したものがある((松尾ら，2004)[15]、(穴見ら, 2004)[16]、(姫野ら, 2005)[17]、(嶋田ら, 2006)[18]、(高上ら, 2007)[19]、(柿本ら, 2007)[20]。街路に関しては，レパートリー・グリッド法や数量化 I 類を用いて温泉地域らしい街路景観の評価構造を明らかにしたもの(金，1999)[12]や温泉地域らしさには「人の気配」と「温泉の気配」が必要との考えのもと、街路景観を評価したもの(安達ら，2009)[5]がある。しかし、これらの景観を評価する主体は、著者や被験者など限定的であり、地域住民の意向が反映された評価とはいい難い。

こうした地域住民の意向が反映された景観の把握にあたり、姫野・佐藤・小林(2002)[21]は、観光パンフレットや絵葉書冊子を構成する景観とこれらの景観が撮影された視点場及びそこからの眺望の特性を明らかにしている。観光パンフレットや絵葉書冊子にみられる景観は、地域住民が観光という観点から利用者に見せたいと考えている景観といえる。したがって、そうした景観に共通してみられる特徴は、観光温泉地域の共有景観であるといえるだろう。

しかし姫野・佐藤・小林(2002)が対象としているのは、観光パンフレット等が撮影された地点のみである。観光温泉地域全体の景観整備の方策を検討するためには、視点場を、対象地域全体に網羅的に設定し、観光パンフレットの撮影に用いられる典型的な視点場のみならず、地域全体の視点場の特性を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、熱海、別府温泉等といった日本を代表する温泉地域の立地環境といえる海浜に立地する温泉地域の一つである長崎県雲仙市の小浜温泉地域を対象に、まず、観光パンフレットや絵葉書冊子等にみられる景観の出現の仕方から共有景観の特性を明らかにした。次に、調査対象地域に網羅的に設定した視点場に関して、各視点場から眺められる共有景観の含まれ方から類型化を行った。次いで、そうした視点場の特性を、視点場形成の重要な要因の一つである視点場がある陸域が造成された時期から考察した。最後にこれまでに得られた知見をもとに、海浜に立地する観光温泉地域の共有景観を眺望できる視点場の形成方策に関わる計画的知見を導出した。

2. 方法

2.1. 対象地域の概要

小浜温泉地域を擁する長崎県雲仙市小浜町は、長崎県北東部に位置する。面積:約 5.0km^2、人口:11,571 人、世帯数:4,117 世帯である。

小浜温泉地域は、雲仙天草国立公園の西部に位置し、橘湾に面する海浜立地型の観光温泉地域である(図 1)。

泉質は、ナトリウム塩化物泉である。高温かつ湯量豊富なために、全国一の放熱量を誇る。

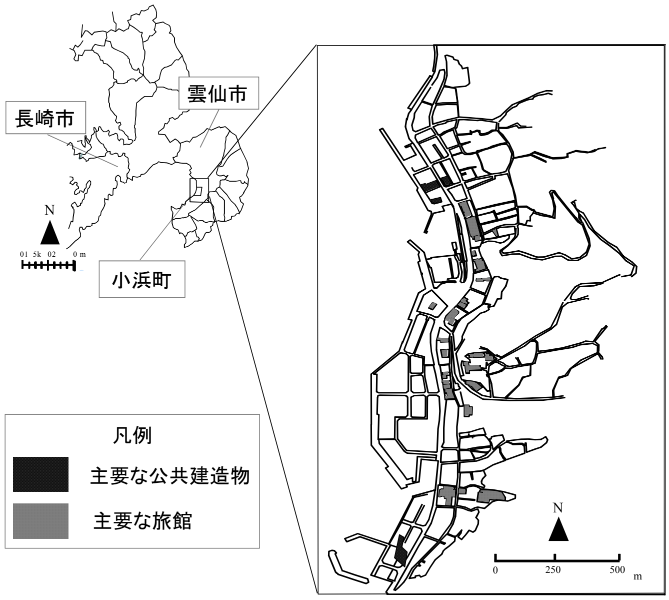


図 1 調査対象地域

表 1 地形と水系資源に着目した温泉街の分類

地形	水系資源	温泉地
Ⅰ - ⅰ	A	銀山 四万 登別
	B	小野川 湯の上 層雲峡
	D	猿ヶ京 温泉津
Ⅰ－ⅱ	A	定山渓 大滝 温海
	B	鳴子 芦の牧 磯部
	C	月岡 湯郷
	D	雲仙
	F	いわき湯本 伊豆長岡
Ⅱ	A	蔵王 野沢 飯坂
	B	渋 玉名 岳
	C	弥彦 有馬
	F	草津 浅間 湯田中
Ⅲ	A	湯村(山梨) 下呂
	D	小浜 日奈久 別府
	E1	洞爺湖 阿寒湖 熱海
	F	山代 道後
Ⅳ	A	湯布院 市比野 川湯
	B	赤湯 天童 石和
	C	山鹿 原鶴
	D	羽合
	E1	湯の川
	E2	皆生
	F	東根 武雄 芦原

註:地形と水系資源の記号の意味は、下記の通りである。

地形		水系資源	
Ⅰ - ⅰ	谷間山間狭小部	A	川貫通型
Ⅰ - ⅱ	谷間山間平地部	B	川隣接型
Ⅱ	傾斜地	C	川挟型
Ⅲ	傾斜地～平地	D	海、湖、潟隣接型
Ⅳ	平地	E1	海、湖隣接・川貫通型
		E2	海隣接・川隣接型
		F	水系資源なし

出典:山田・宮崎(2008) [22]をもとに作成

表 1 は、地形と水系資源から温泉街を分類したものである(山田・宮崎,2008)[22] 。

小浜温泉地域は、傾斜地に立地し、海・湖・潟などに隣接するタイプに該当する。小浜温泉地域以外では、熊本県八代市の日奈久温泉、大分県別府市の別府温泉が同類型に含まれる。小浜温泉地域を調査対象とすることは、こうした類似する立地環境にある観光温泉地域の景観の整備方策に関わる基礎的知見が得られる点で、妥当な選定であると考えた。

2.2. データの取得及び解析

2.2.1. 共有景観の特性

1.はじめにで述べたように、観光パンフレット・絵葉書冊子(以下では、観光資料と称す)の画像(以下では、景観画像の称す)(図 2)は、地域住民等が当該地域を観光温泉地域として認識する根拠となる景観と考えられ、先行研究でもそのことが確証されている。そこで本研究では、観光資料の景観画像から共有景観の特性を明らかにした。

観光資料として、2009 年 7～9 月に調査対象地域においてガイドブック、旅館のパンフレット、ポストカード等の計 37 を取得した。次に取得した資料から 2 つの基準、すなわち、(1)屋外にて撮影されていること、(2)屋内(旅館内)であっても外部を意識して撮影されていること、いずれかの基準を満たす景観画像を抽出した。その結果、計 212 枚の景観画像が取得された。

取得された景観画像を構成する景観構成要素を明らかにした。景観構成要素の設定にあたっては、景観画像と須田(2003)[23]の観光資料の分類とを照合し、KJ 法による関係者の協議のもとに行った。

設定された景観構成要素を景観画像から目視にて抽出し、各景観構成要素の出現頻度を算出した。抽出にあたっては、画像に含まれているか否かで

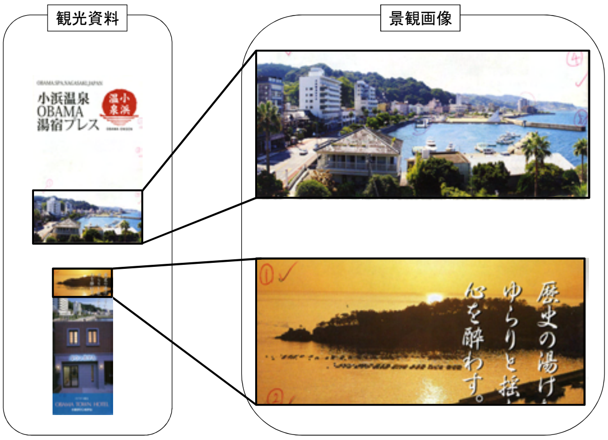


図 2 観光資料・景観画像の例

判断した。したがって、ある景観構成要素が画像中に複数回出現しても 1 とカウントした。

共有景観は、景観画像に出現する頻度をもとに選定した。具体的には、頻度をもとに順位付けをおこない、第三四分位数より上位にある景観構成要素を共有景観とした(後出の 3.1.2.を参照のこと)。

2.2.2. 共有景観の含まれ方から見た視点場の類型化

視点場の設定にあたり、調査対象地域に 50m×50m のメッシュを掛け、メッシュの交点を視点場とした。なおその際、(1)建造物の内部、(2)民家の敷地、(3)歩行が困難な傾斜地は、除外した。その結果、128 箇所の視点場が設定された。

撮影視点の高さは、平均的な人の視線の高さを考慮し、1.6m とした。同地点から、画角 63°の写真を重なりが少なくなるように 6 枚、デジタル 1 眼レフカメラ(Nikon D60)にて撮影した。撮影した写真は、撮影地点の 360°の景観が収まるようにつなぎ合わせることで、パノラマ写真に加工した。

次に、視点場の類型化にあたり、指標として、パノラマ写真に占める各景観構成要素の比率を設定した。景観構成要素としては、6 種(共有景観 5 種(詳細は後出の 3.1.2.を参照のこと)とその他(共有景観以外)1 種)を設定した。指標の算出にあたっては、パノラマ写真を 6 種の景観構成要素に分割し、Adobe Photoshop(Adobe Systems 社製)のヒストグラム機能を用い、パノラマ写真内の各景観構成要素に該当するピクセル数を計測し、パノラマ写真内の全ピクセル数に占める比率を算出した。こうして算出された比率を変数としたクラスター分析(大規模クラスタ分析)を行い、128 の視点場を類型化した。

最後にこのような手続きを経て類型化された視点場の空間布置を作成し、分布傾向及びその要因を把握した。

なお、クラスター分析の実行には、SPSSver17.0 (SPSS 社製)を用いた。

2.2.3. 造成時期からみた視点場の特性

視点場が造成された時期を明らかにするにあたり、調査対象地域の陸域を造成された時期にもとづき区分した。時期区分には、山口ら(1988) [24]による『長崎県温泉誌・小浜温泉』、小浜町(1994) [25]による『小浜町のあゆみ』に掲載された地図、そして国土地理院発行の 1/25000 地形図を用いた。

視点場の特性を明らかにするために、類型化された視点場の空間布置と、陸域造成区分図とを重ね合わせ、各時期の陸域に含まれる視点場を類型ごとに集計した。集計した結果から特化係数を算出した。特化係数の式は、下記の通りである。

$$特化係数 = \frac{(時期aの類型iの視点場数) \div (類型iの視点場数)}{(時期aの視点場数) \div (総視点場数)}$$

通常は、1 を超えると、関係が強いとされている(大友,1999) [26]。したがって、本研究においても特化係数が 1 を超えたものは、関係が強いと判断した。

3. 結果と考察

3.1. 共有景観の特性

3.1.1. 景観画像にある景観構成要素

景観画像に含まれている景観構成要素は、2 つの観点(自然要素か人文要素か、有形か無形か)から、表 2 のように整理された。具体的に、自然要素・有形のものとしては低山地、傾斜地、海等、自然要素・無形のものとしては湯煙、夕日、人文要素・有形のものとしては観光関連公共施設、公園、旅館等、人文要素・無形のものとしては祭、イベントがみられた。

3.1.2. 景観画像に含まれる景観構成要素の傾向

図 3 は、景観画像に含まれる景観構成要素の出現頻度を表したものである。

表 2 小浜温泉地域の景観画像に含まれていた景観構成要素

	有形		無形
自然要素	・低山地，傾斜地 ・海 ・湧水 ・植物 ─ 花卉(ジャガランタなど)／街路樹／森林		・湯煙 ・夕日
人文要素	・観光関連公共建造物(小浜総合支所，観光協会，リフレッシュセンターなど) ・公園 (マリンパーク，広場など) ・旅館(旅館街，旅館外観写真) ・旅館関連設備(露天風呂，温泉卵など) ・浴場(海上露天風呂，公衆浴場など) ・観覧温泉(炭酸泉，間欠泉など) ・記念碑(像，石碑など)	・寺社、仏閣 ・海岸構造物(堤防，船着場など) ・養殖場 ・駐車場 ・道路 ・商店	・祭 ・イベント

全景観構成要素に占める自然要素の割合は 56.1%であるのに対して、人文要素は 43.9%であり、自然要素の占める割合が高い。自然要素と人文要素の出現頻度の分布を把握するために両要素の出現頻度に関する基本統計量を算出した。表 3 は、その結果である。

自然要素の出現頻度の平均は、7.0%と全体より高い。標準偏差とレンジも 5.5%、16.2%と、全体より高い。このことは、自然要素に該当する景観構成要素が景観画

像に登場することが多いことを示すものといえる。しかし、登場する多さは、景観構成要素によって大きく異なるといえる。それに対して、人文要素の出現頻度の平均は 2.7%と、全体よりも低い。標準偏差とレンジもそれぞれ 2.0%、8.1%と、全体より低い。このことは、人文要素に該当する景観構成要素が景観画像に登場することが少ないことを示唆するものといえる。ただし、登場する多さは、景観構成要素によって大きく異ならないといえる。

3.1.2. 抽出した共有景観の特徴

第三四分位数は、植物(街路樹)の 15.1%であった。そのため、上位 5 つを共有景観とした。その結果、共有景観は「海」、「低山地」、「旅館」、「夕日」、「湯煙」となった。

海の総景観画像数に含まれる割合は 50.9%であり、最も多く見られた。海が最も多いのは、海浜に立地する小浜温泉の立地特性と、それを観光に関連する主体が観光からみて利用者に伝えるべきものと考えているからと推察される。2 番目は低山地・斜面地であり、総景観画像数に含まれる割合は 41.5%である。海に次いで多いのは、低山地のふもとに立地し、また海を介した向かい側にも存在するため、撮影方向を問わず写ることが多いからと考えられる。旅館が含まれる割合は 24.5%であり、3 番目に多かった。これは本研究において扱った資料の多くが、旅館のパンフレットであることが理由として考えられる。4 番目は夕日で、21.7%の景観画像に含まれていた。夕日が含まれているのが多いのは、夕日に関わる歌碑がある、観光資料に多くの記述があるなど、調査地域の景観を象徴するものとして認識されているからと考えられる。5 番目は、17.0%の景観画像に含まれていた湯煙であった。これは、他の観光温泉地域と同様に、観光温泉地域を象徴するものと考えられているからと推察される。

3.2. 共有景観の含まれ方から見た視点場の類型化

3.2.1. 視点場の類型化

クラスター数の設定にあたっては、クラスター数を 5 から 10 まで設定し、クラスター間の違いが最も明瞭となり、結果を考察する上で適切だと考えられるクラスター数を検討した。その結果、クラスター数は 6 が適切と考えられた。表 4 は、各クラスターにおける景観構成要素の比率を示したものである。同表をもとに各類型を、各景観構成要素と全体の平均との比較から解釈すると、下記の通りである。

(1)クラスター1(共有景観複合型(図 4))

夕日、低山地、旅館、湯煙が高かった。ほとんどの共有景観を含んでいることから、共有景観複合型と名付けた。

(2)クラスター2(旅館街型(図 5))

夕日、旅館、湯煙が高かった。旅館とその周辺にみられるものが含まれていることから、旅館街型と名付けた。

(3)クラスター3(高自然卓越型(図 6))

夕日、低山地、海が高かった。クラスター4 と比較すると、各項目の比率が高かった。自然に関わるものを含み、比率がクラスター4 と比べて高いことから、高自然卓越型と名付けた。

(4)クラスター4(低自然卓越型(図 7))

夕日、低山地、海が高かった。しかしクラスター3 と比較すると、各項目が低かった。自然に関わるものを含んではいるものの、比率がクラスター3 と比べて低いことから、低自然卓越型と名付けた。

(5)クラスター5(旅館型(図 8))

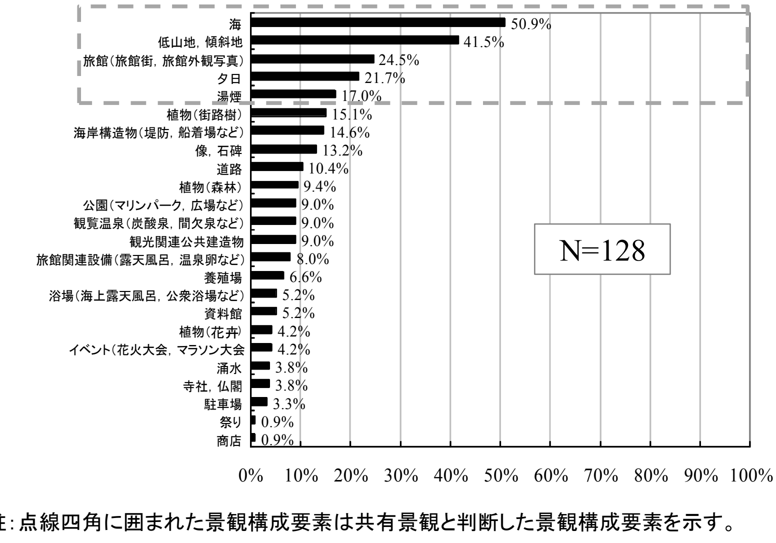
旅館のみが高かった。以上から、旅館型と名付けた。

(6)クラスター6(共有景観欠落型(図 9))

共有景観は、全てにおいて低い値を示していた。その代わりに、その他の値が高い値を示していた。以上から、共有景観欠落型と名付けた。

3.2.2. 各類型の空間布置

図 10 は、各類型の空間布置を示している。



註:点線四角に囲まれた景観構成要素は共有景観と判断した景観構成要素を示す。

図 3 各景観構成要素の全景観画像に出現する頻度(単位:%)

表 3 自然･人文要素の出現頻度に関わる基本統計量(単位:%)

	平均±標準偏差	最大値	最小値	レンジ
自然要素	7.0 ± 5.5	17.5	1.3	16.2
人文要素	2.7 ± 2.0	8.4	0.3	8.1
全体	4.2 ± 4.1	17.5	0.3	17.2

表 4　各クラスターにおける景観構成要素の比率と名称

クラスター番号	景観構成要素(単位:%)						地点数	全地点数に占める割合(単位:%)	クラスター名称
	共有景観					その他			
	夕日	海	低山地	旅館	湯煙				
1	**20.6**	0.8	**3.7**	**19.6**	**0.4**	53.9	4	3.1	共有景観複合型
2	**18.9**	0.4	1.5	**43.0**	**0.9**	35.3	3	2.3	旅館街型
3	**31.6**	**4.3**	**7.2**	3.4	0.2	53.4	43	33.7	高自然卓越型
4	**20.5**	**1.6**	**4.0**	1.5	0.3	**72.2**	37	28.9	低自然卓越型
5	4.4	0.0	0.0	**21.2**	0.0	**74.4**	1	0.8	旅館型
6	6.0	0.3	1.8	1.3	0.0	**90.7**	40	31.2	共有景観欠落型
平均値	17.0	1.2	3.0	15.0	0.3	63.5	全地点数	128	

註:下線・太字にて強調されているセルは、全体の平均よりも高いことを表している。

図 4　共有景観複合型

図 5　旅館街型

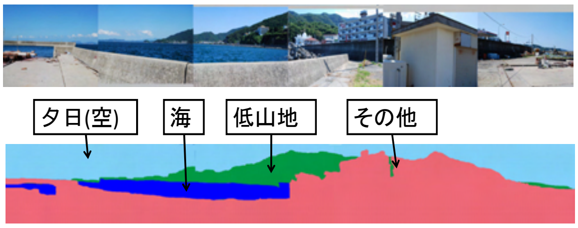


図 6　高自然卓越型

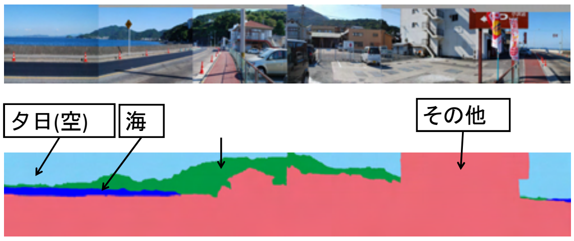


図 7　低自然卓越型

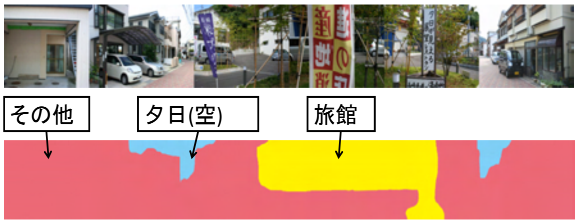


図 8　旅館型

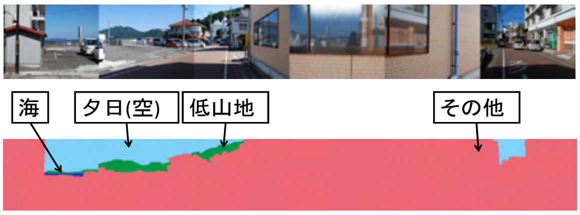


図 9　共有景観欠落型

共有景観複合型の多くは、国道 251 号線沿いの北部に分布している。旅館街型の多くは、国道 251 号線沿いの北部に分布している。高自然卓越型は、国道 251 号線よりも海側、特に、南部に多く分布している。低自然卓越型の多くは、高自然卓越型と同様に、国道 251 号線より海側と、とけん山公園等の内陸の標高が高い所に分布している。旅館型は、旧主要街路の南部に 1 地点のみ分布している。これは撮影地点の近傍が大型旅館であり、眺望が遮られていたためと考えられる。共有景観欠落型の多くは、旧主要街路沿いと内陸の標高が高い所に分布している。

3.3. 造成時期からみた視点場の特性

3.3.1. 造成時期からみた陸域の区分

調査対象地域の陸域は、3 区分された。具体的には、資料の制約から陸域の造成が確認できなかった陸域を「既成陸域」、1956 年から 1994 年にかけて造成された陸域を「前期陸域」、1995 年以降に造成された陸域を「後期陸域」とした(図 11)。造成が確認された陸域の主要な特徴は、下記の通りである。

(1) 前期陸域(1956-1994 年)

同時期の主要な特徴は、北部と南部の陸域造成である。造成された北部には、内陸部に立地していた小浜町役場(現雲仙市役所小浜総合支所)が移転した。その他には、橘湾東部漁業協同組合本所や小浜温泉観光協会なども同陸域に建設された。

(2)後期陸域(1995 年-)

同時期の主要な特徴は、中央部の大幅な拡充である。同陸域は、小浜町(1994)によると、リゾート開

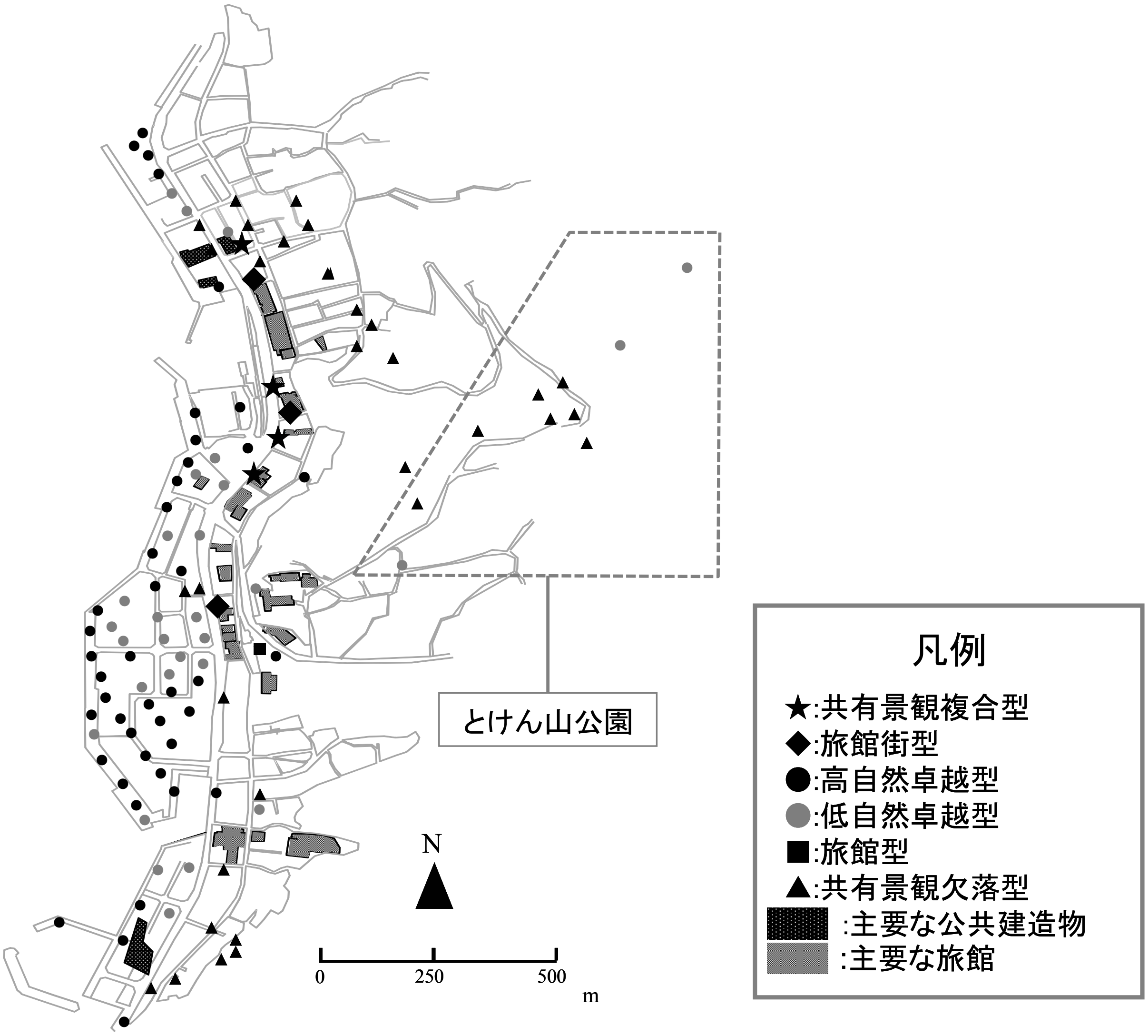


図 10 各類型の空間布置

発及び地域住民の憩いの場を形成するために造成された。同陸域には、雲仙警察署が移転した。また、小浜マリンパーク、商業施設、飲食店などが造成され、現在みられる街並みが形成された。

3.3.2. 陸域の造成時期と視点場の関係

表 5 は、陸域の造成時期と視点場の類型との関連の強さをみるために、算出した特化係数を示したものである。

既成陸域において特化係数が高い類型は、1.共有景観複合型(1.06)、2.旅館街型(2.12)、4.低自然卓越型(1.09)、6.共有景観欠落型(1.64)である。これは、既成陸域が旅館、夕日、湯煙、低山地を眺められる視点場を多く含むことを示唆している。旅館、湯煙を眺められる視点場が多いのは、旅館街に近接しているからと考えられる。夕日、低山地を眺められる視点場が多いのは、(1)視点場の標高が高いこと、(2)視点場に隣接する陸域において建物の建造が進んでいない部分があることから、可視領域が広く、眺望が確保されているためと考えられる。他方、共有景観を眺められない視点場が多いのは、旅館街から離れ、建物や植物により眺望が阻害されているからと考えられる。

前期陸域において特化係数が高い類型は、3.高自然卓越型(1.36)、6.共有景観欠落型(1.71)である。自然資源を含む視点場の特化係数が高い一方で、共有景観を含まない視点場の特化係数がもっとも高い。これは、海に近く建物が少ないため、可視領域が広く、眺望が確保された視点場がある一方で、施設(小浜町役場・漁業組合等)が建造されているため、可視領域が限られ、眺望が阻害された視点場があるからと考えられる。

後期陸域において特化係数が高い類型は、1.共有景観複合型(1.18)、3.高自然卓越型(1.75)、4.低自然卓越型(1.14)である。ここで着目すべきは、高自然卓越型の特化係数がもっとも高い、すなわち、眺望に自然資源(夕日、海、低山地)を多く含む視点場が多い

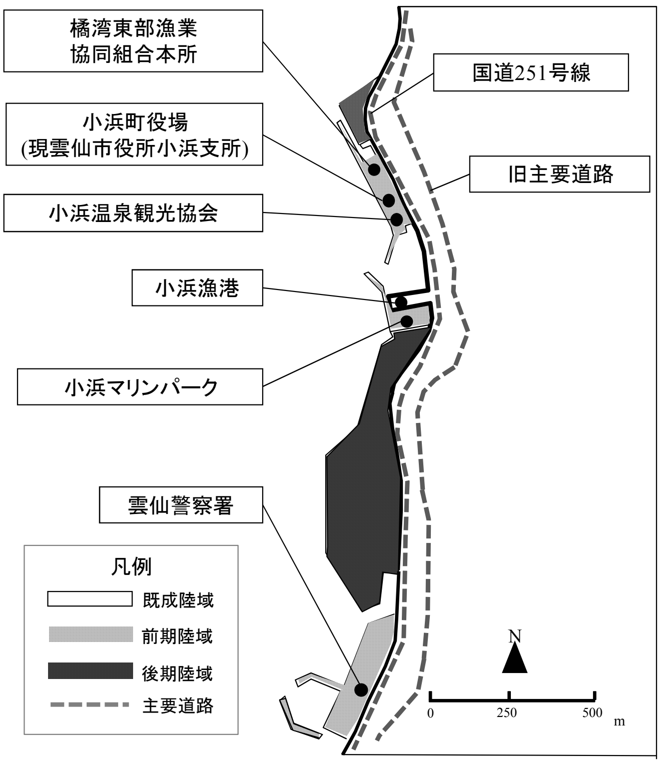


図 11 造成時期からみた陸域の区分

表 5 区分された陸域と類型化された視点場との関係

クラスター番号	クラスター名称	既成陸域	前期陸域	後期陸域	合計
1	共有景観複合型	**2(1.06)**	0	**2(1.18)**	4
2	旅館街型	**3(2.12)**	0	0	3
3	高自然卓越型	5(0.25)	**6(1.36)**	**32(1.75)**	43
4	低自然卓越型	**19(1.09)**	0	**18(1.14)**	37
6	共有景観欠落型	**31(1.64)**	**7(1.71)**	2(0.12)	40
	合計	60	13	54	127

註: 1)旅館型は、サンプル数が少ない(n=1)のため、分析対象外とした。
2)太字・下線を付したセルは、特化係数が高い(1.00 以上)ことを表している。

ことである。これは、(1)建物が集積している旅館街から離れていること、(2)造成されてから時間がたっておらず地域内に建物が少ないことから、可視領域が広く、眺望が確保されているからと考えられる。

4. 結論

4.1. 小括

本研究の結果は、以下の 3 点に集約される。

(1)海浜に立地する観光温泉地域(小浜温泉)の共有景観を、観光資料に掲載されていた景観画像に出現する頻度の高さをもとに、明らかにした。その結果、共有景観として、「海」、「低山地」、「旅館」、「夕日」、「湯煙」が抽出された。

(2)共有景観の含まれ方からみた視点場の類型化を、メッシュ法により網羅的に抽出された 128 の視点場を対象に行った。その結果、6 つ(共有景観複合型、旅館街型、高自然卓越型、低自然卓越型、旅館型、共有景観欠落型)に類型された。

(3)類型化された視点場の特性を造成時期から考察するために、調査対象地域を 3 区分 (既成陸域、前期陸域、後期陸域)した。そして類型化された視点場と造成区分図を重ね合わせ、集計し、両者の関連の強さを把握するために、特化係数を算出した。その結果、旅館街に近接し建物が多い既成の陸域においては旅館・湯煙を眺められる視点場が多くみられ、旅館街から離れ建物が少ない前期・後期の陸域においては海、夕日、低山地といった自然資源を眺められる視点場が多くみられた。

4.2. 海浜に立地する観光温泉地域の共有景観を眺望できる視点場の整備に向けて

本研究で明らかにされた共有景観(海、低山地、旅館、夕日、湯煙)のうち、「海」と「夕日」は、海浜に立地する観光温泉地特有の共有景観と考えられる。「海」と「夕日」は、山村(2006) [4]が提示した観光温泉地域に対して利用者が求めるもの(「自然資源」)と一致する。すなわち、他の観光温泉地域と差別化が図られた視点場を整備するためには、「海」と「夕日」が眺望できることが重要と考えられる。

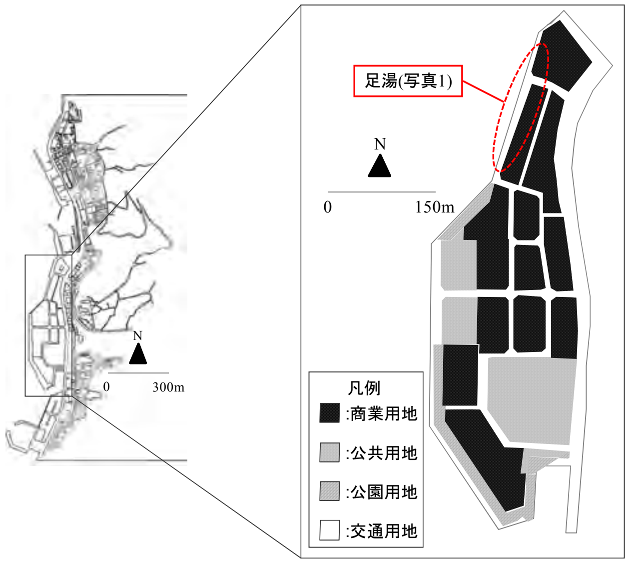
こうした「海」と「夕日」を眺望できる視点場(高自然卓越型)は、海に近い新規に造成された陸域に多く含まれていることを、本研究において明らかにした。小浜温泉に限らず海浜に立地する観光温泉地域の多くは、活用できる土地を増やすために、たびたび埋め立てが行われてきた。(例えば、松村・西(2006) [27]など)。海浜に立地する観光温泉地域において、他の観光温泉地域と差別化が図られた視点場を整備するためには、古くからの旅館が集積している旧来の地域にくわえて、こうした新しく造成された陸域を積極的に活用していくことが望ましいと考えられる。

しかし、これら新しく造成された陸域を、上記の目的に活用するときに、留意すべきことは、土地利用の意向である。すなわち、陸域の有効利用に向けて高層の建物の建造を想定した土地利用計画が検討されている場合があることである。そのため、高層の建物が建造され、当陸域の視点場の特性である自然資源の眺望が喪失する可能性がある。たとえば、図 12 は、小浜温泉地域の後期陸域における土地利用

計画図である。同図から当地域の多くは、商業用地として計画されていたことがわかる。また、小浜温泉地域の都市計画規制は、未線引き・用途地域未指定の都市計画区域と、緩い規制が敷かれている。こうした土地利用計画と都市計画規制のもとでは、高層の建物の建造が許容され、自然資源の眺望を喪失しかねない。このような状況は、海浜に立地する他の観光温泉地域においてもしばしばみられると考えられる。

今後、海浜に立地する観光温泉地域において、他の観光温泉地域と差別化が図られた視点場を整備するためには、視点場の整備ともに、視点場の眺望を喪失させない計画づくりを検討することが必要と考えられる。

こうした計画づくりに資する方策として、着目される小浜温泉における方策に、2009 年に整備が完了



出典:小浜町(1994)[25)]にもとづき作成

図 12 後期陸域における土地利用計画図

出典:春陽館ホームページ [28)] から引用

写真 1 新規に造成された足湯

した、陸域への足湯の建設がある(写真 1)。足湯は、観光を目的とした外部の人ばかりでなく、地域住民にも良く利用されている。こうした利用を通じて、足湯は、所期の目的(視点場の整備)とともに、新規に造成された陸域に対する地域住民の認識を変容させ、視点場の眺望確保を目的とした面的な計画づくりの契機を醸成させることが期待される。

今後の課題としては、本調査の精緻化(より緻密な視点場の設定、異なる季節での調査の実施等)や、本調査と異なる主体(観光業に関与していない地域住民等)が共有する景観像の把握等などが挙げられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、現地踏査にご協力いただいた雲仙市小浜町の方々に深甚の謝意を表する。

注

(1)本研究では、観光温泉地域を、松田・大場(2004)[29)]にもとづき、「温泉という特異な資源に依拠して成立した地域」と定義する。

(2)本研究では、景観を、中村(1977)[30)]の定義、すなわち、「景観とは、人間をとりまく環境のながめに他ならない」にしたがい、可視できるものに限るとした。

参考文献及び WEB サイト

1)日本観光協会(2009):『数字でみる観光　2009-2010 年版』.創成社.

2) 環境省 (2010) :『温泉利用状況』.(URL: http://www.env.go.jp/nature/onsen/data/(閲覧日：2010/4/14))

3)久保田美穂子(2008):『温泉地再生　地域の知恵が魅力を紡ぐ』.学芸出版社.

4)山村順次(2006):近年における温泉と温泉地をめぐる諸問題.同志社商学,57(5),pp.217-239.

5)安達可菜・宗邦彦・高村文人・永山一樹・渡辺貴史(2009)：温泉地域らしさからみた街路景観の評価:長崎県雲仙市小浜温泉地域を事例として.環境教育研究マネジメントセンター年報, 1, pp.25-36.

6)姫野由香・佐藤誠治・小林祐司・穴見修司(2003)：温泉地における湯煙景観に関する研究―その 1―.日本建築学会学術講演梗概集(東海),pp.615-616.

7)穴見修司・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司(2003)：温泉地における湯けむり景観の特性に関する研究―その 2―.日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), pp.617-618.

8)松尾沙央里・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司・嶋田麻世(2005)：観光地における戦略的な景観整備誘

導システムの提案—その 1—.日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿),pp.191-192.
9)下村彰男(1989)：温泉地における街路空間の多様性に関する考察.日本観光研究者連合全国大会研究発表論文集,第 4 号,pp.77-84.
10)高橋啓太・宮崎均・山田桐子(2008)：温泉街のまちづくりにおける街路空間の物理的構成に関する研究～群馬県伊香保温泉を事例として～.日本建築学会大会学術講演梗概集(中国),pp.649-650.
11)宮崎均・山田桐子・高橋啓太(2008)：温泉街の物理的構成要素からみた街路空間の空間構成に関する研究—群馬県伊香保温泉を事例とした温泉街のまちづくり.環境情報科学論文集,22,pp.375-380.
12)金炫(1999)：韓国と日本における温泉地の景観評価に関する研究.東京大学農学部演習林報告,102,pp.1-69.
13)穴見修司・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司(2003)：温泉地における湯煙景観の特性に関する研究—その 2—.日本建築学会大会学術講演梗概集(東海),pp.617-618.
14)嶋田麻世・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司・松尾沙央里(2005)：観光地における戦略的な景観整備誘導システムの提案—その 2—.日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿),pp.193-194.
15)松尾沙央里・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司・穴見修司(2004)：観光地における戦略的な景観整備誘導システムの提案—その 2—.日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道),pp.241-242.
16)穴見修二・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司・松雄沙央里(2004)：観光地における戦略的な景観整備誘導システムの提案—その 1—.日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道),pp.239-240.
17)姫野由香・佐藤誠治・小林祐司・松尾沙央里・嶋田麻世(2005)：観光地における大規模景観の評価と景観構成要素の影響度.日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿),pp.195-196.
18)嶋田麻世・佐藤誠治・姫野由香・小林祐司・高上旭(2006)：観光地における戦略的な景観整備誘導システムの提案—その 3—.日本建築学会大会学術講演梗概集(関東),pp.409-410.
19)高上旭・佐藤誠治・姫野由香・柿本奈美(2007)：景観構成要素の配置条件および整備対策方針の導出—鉄輪温泉地区を対象として—.日本建築学会大会学術講演梗概集(九州),pp.719-720.
20)柿本奈美・佐藤誠治・姫野由香・小林誠治・高上旭(2007)：鉄輪温泉地区における住民を主体とした景観まちづくりの方向性.日本建築学会大会学術講演梗概集(九州),pp.717-718.
21)姫野由香・佐藤誠治・小林祐司(2002)：観光画像からみた景観特性の解析に関する研究.日本建築学会計画系論文集,559,pp.187-193.
22)山田桐子・宮崎均(2008)：温泉街における地域特性からみたまちづくりに関する研究-地理的条件ならびに形成過程からみた地域特性の傾向-.日本建築学会計画系論文集,626,pp.819-826.
23)須田寛(2003)：『新・観光資源論』.交通新聞社.
24)山口道雄・熊野眞佐代・益田宣弘・平山文俊(1988)：長崎県温泉誌・小浜温泉.長崎県衛生公害研究所報,29,pp1-247.
25)小浜町(1994)：『小浜町 70 年の歩み・町制施行 70 周年記念小浜町制要覧』.小浜町.
26)大友篤(1999)：『地域分析入門【改訂版】』. 東洋経済新報社.
27)松村恵・西英子・小峯裕(2007)：八代市日奈久温泉街の生活景に関する研究～まち並み形成とその変容～.日本建築学会九州支部研究報告集,46, pp.549-552.
28)春陽館 ： URL:http://www.shunyokan(閲覧日 ： 2010/3/18)
29)松田規子・大場修(2004)：泉源開発と旅館街の立地傾向にみる近代大規模温泉町の成立過程—別府温泉を事例として—.日本建築学会計画系論文集,582,pp.153-159.
30)中村良夫他(1977):『景観論(土木工学大系 13)』.彰国社.